極薄土佐和紙 世界へ

古美術修復で活躍

「ひだか和紙」塩素不使用の製法開発

高岡郡日高村の「ひだか和紙」（鎮西まり子社長）が開発した極薄の典具帖紙（てんぐじょうし）が、国内外の美術品や文化財の修復の専門家から注目されている。白い紙ながら塩素を使わない独特の製法のため、書物だけでなく木像修復などの分野でも重宝されている。（浅田美由紀）

同社は昭和四十年代から製造を機械化。メーンの薄い典具帖紙は掛け軸の裏打ち紙、ラッピング紙、ちぎり絵紙などの原紙として、相手先ブランド生産（OEM）で製品を出荷してきた。

しかし、業界の慣習などもあり、自社製品が最終的にどこへ売られ、どう使われているかは詳しく把握できないまま。数年前、「お客さんが何を求めているか直接知りたい」と独自に用途を調べるうち、古文書や文化財の修復にも使われていることを知ったという。

ただ、和紙の製造では一般的に、楮（こうぞ）を漂白する際に塩素を使用。塩素の残留によって、黄ばみや変色、絵の具の劣化が起きたり、紙繊維そのものを弱める原因にもなっていた。

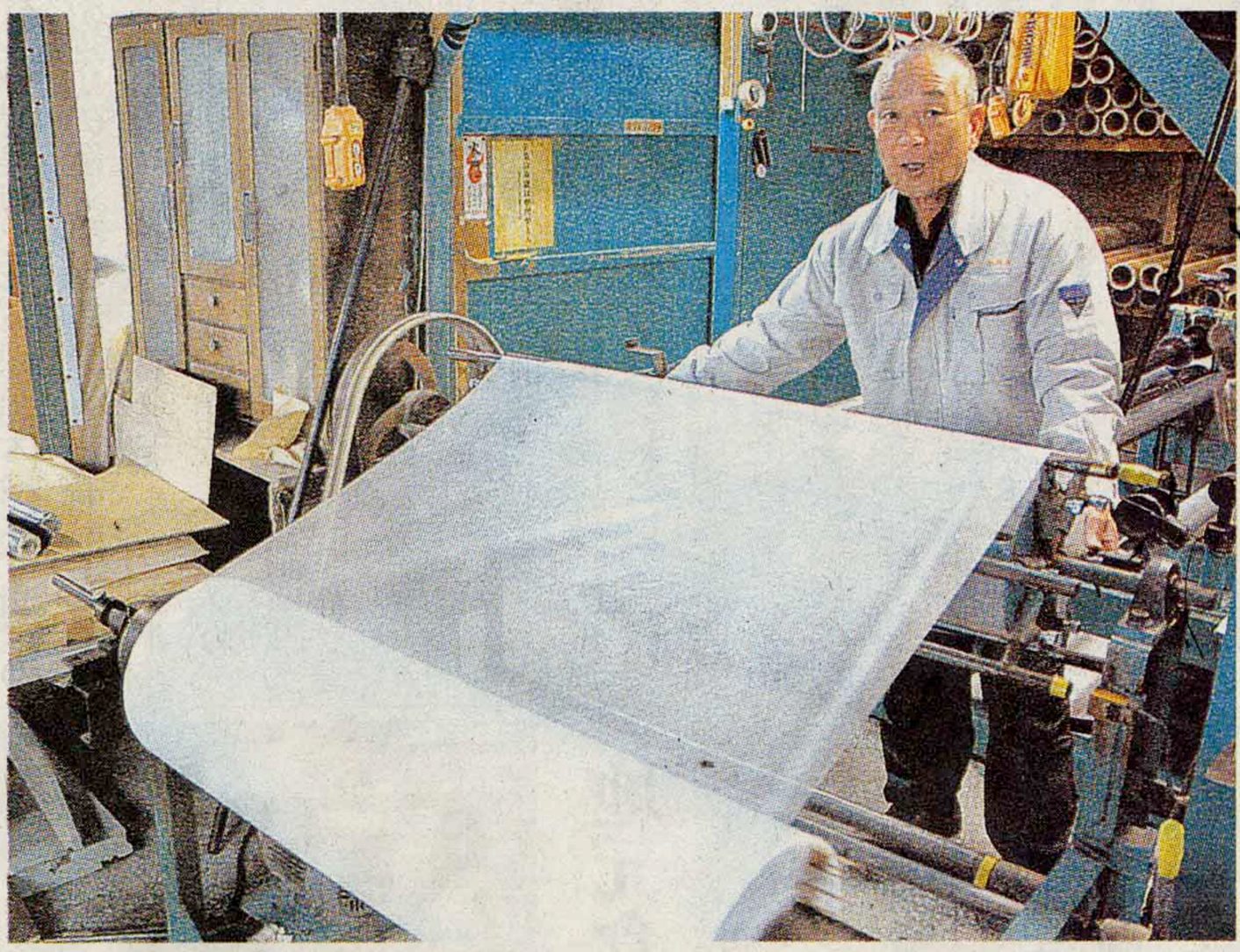
「文化財の修復は何百年もの長い歳月に耐えるものでなくてはいけない」。そう考えた同社は、修復用に使われる典具帖紙の製造方法を変えようと模索。経済産業省の助成も受け、塩素の代わりに中性の薬品を使う特殊な手法を編み出した。

「おそらく世界で一番薄い」と自信をのぞかせる同社製品は、最も薄い紙で一平方㍍わずか三・五㌘と通常の半分以下。新開発の典具帖紙は、スペインやポルトガルなどの国立図書館・博物館をはじめ、サウジアラビアやドイツ、中国、台湾など各国で絵画や古文書などの修復に用いられているという。

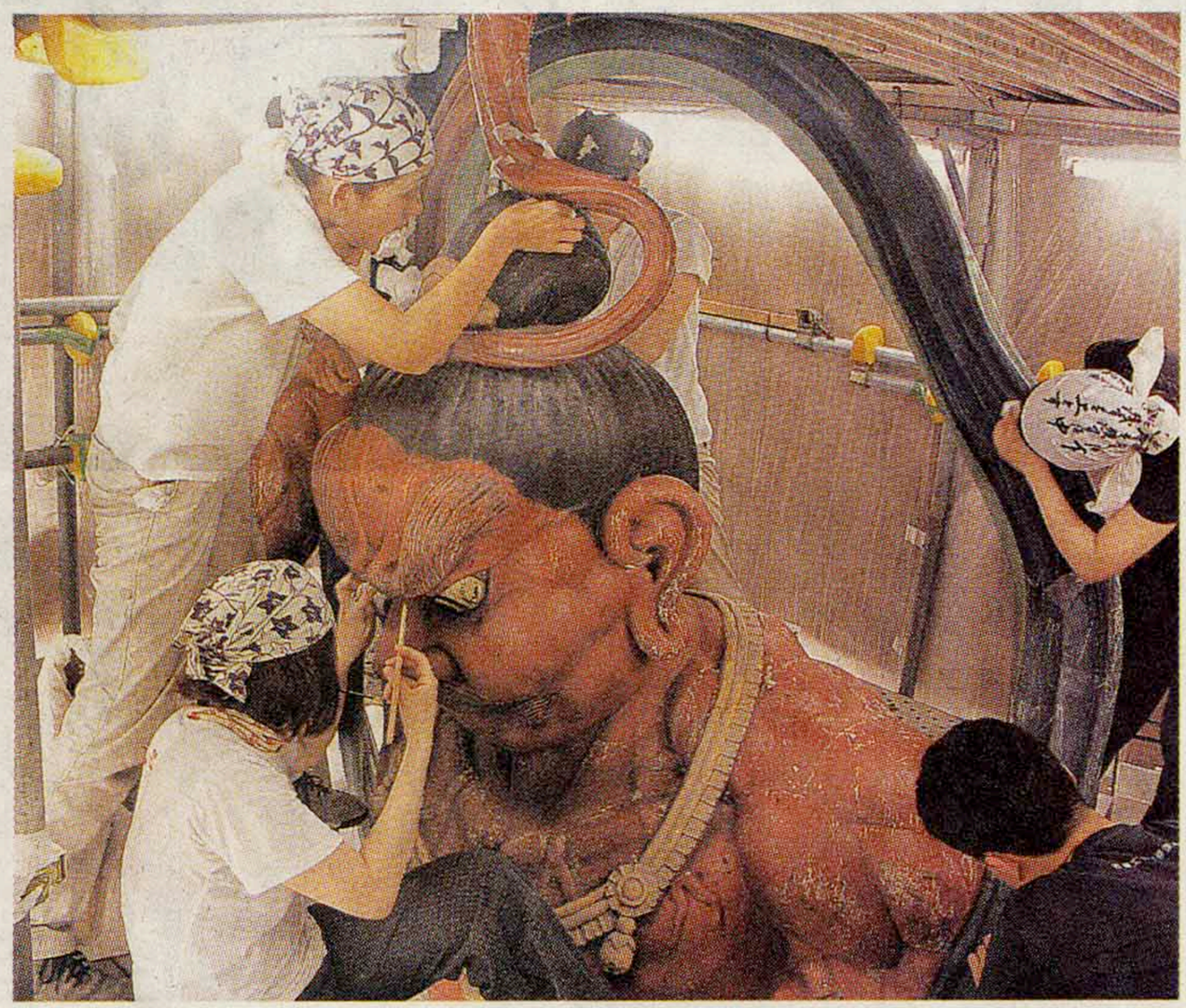
日本では東京・浅草寺宝蔵門の阿吽（あうん）像、東京国立博物館所蔵のアイヌの盆の表面の修復作業にも使われた。

作業に携わった吉備文化財修復所（さいたま市）の牧野隆夫さんによると、長年の風雨で傷みもひどかった阿吽像の場合、表面に極薄典具帖紙を張ることで、はがれかかっている彩色を保護。「彫刻の細かな曲面に沿って自由自在になじませるためには、薄く、透けて、繊維が長くて丈夫な和紙がいい。これからもいろんな場面で使える」（牧野さん）という。

同社の鎮西寛旨さんは「これからも売り先を広げ、各国での修復に役立ちたい」と話している。



塩素を使わない独特の方法で作られる典具帖紙（日高村のひだか和紙）



浅草寺宝蔵門の吽形（うんぎょう）像の修復作業。像表面の色落ちを止めるため極薄の和紙を張り、筆などを使って彩色層を押さえ込む修復スタッフ（東京都台東区、吉備文化財修復所提供）